

◆連載

いま留萌むかし 第二話

●元町の大火

昭和三十三年五月二十三日午後一時五十分留萌消防署の火災専用電話が鳴り響いた。折しも連日の好天が続ぎ、五月としては異常な高温が続いていた。留萌には異常乾燥注意報と火災注意報が連日出されていた。この日も、留萌消防署では午前十時市内主要防火建物三百余カ所に対して電話で火気取扱の注意を指示し、広報車を出動させ、市民に対して注意を喚起していた。また、午後一時サイレンを鳴らし、警戒心を喚起すると共に市消防職員を非番を含め、全員の招集を行い、平常一名の望楼監視も三名に増やし、各消防ポンプ自動車に消防署員を乗せ、乗車待機するという稀に見る非常警戒体制をしいていた。

特に、火災火元となった元町二丁目北船荘は木造バラック二階建葺葺の老朽化した戦時中の工員宿舎であり、防火

設備が整っておらず、昭和三十三年二月一日付で所有者である北海道造船株式会社に対して厳重な施設の改善改修を勧告していた危険建物であった。

このため当日この建物から出火した場合元町地域全域への類焼は免れないとして、午後一時火災警報が発令されると共に、元町第二出張所勤務員を北船荘へ行かせ火気取扱の制限を命じ、続いて一時四十分には同地域消防団第三分団三名を再度北船荘へいかせ、火気の一斉使用を禁止するという慎重な警戒をしていた。

そのためかかわらず、このわずか十五分後、悪魔の火の手があがろうとは誰も思わなかったことだろう。瞬間風速二十二メートル、湿度三十三パーセント、東高西低の気圧配置はフェーン現象を起こし、火災発生の要因は揃っていたといえよう。

付近の人の通報と望楼からの発見は同時であった。すぐに待機中の消防車五台が出動したが、道路工事や悪路のため現場到着は七分後のことであつた。既に現場付近は火の手がまわり国道を消防車が通過することさえやつとの状況になっていた。しかし、おりの強風は火の粉を風下に撒き散らし、あちらこちらから第二第三の火の手があがり手のつけられる状況ではなくなっていた。火勢が衰えたのは午後二時三十分、わずか一時間三十五分の間に百八十一棟二百五十二戸が灰塵に帰し、二百二十五世帯千二百三十五人の人たちが焼けだされた。これにかりだされた消防車は留萌六台、増毛一台、小平二台、自衛隊留萌駐屯部隊から一台の計十台であつた。

現場付近一帯は働きにでた男たちの留守を守る女たちがやつとのもので火の中から逃

れでて、盛んに燃え盛る我家をふりかえり、僅かに持ち出した家財道具によりかかり、呆然として立ちすくむ姿、号泣する姿など、阿鼻叫喚の様相を呈していた。

この災害にたいして道内外から多くの善意が寄せられた。我々はこの災害の経験と多くの善意を後世の人たちに語り継いでいかねばならない。

このため当日この建物から出火した場合元町地域全域への類焼は免れないとして、午後一時火災警報が発令されると共に、元町第二出張所勤務員を北船荘へ行かせ火気取扱の制限を命じ、続いて一時四十分には同地域消防団第三分団三名を再度北船荘へいかせ、火気の一斉使用を禁止するという慎重な警戒をしていた。

そのためかかわらず、このわずか十五分後、悪魔の火の手があがろうとは誰も思わなかったことだろう。瞬間風速二十二メートル、湿度三十三パーセント、東高西低の気圧配置はフェーン現象を起こし、火災発生の要因は揃っていたといえよう。



元町の大火

昭和63年9月発行・留萌市編集・企画振興室印刷・白鷺印刷株式会社

1988

9

特集 高齢者パワー活躍中。

るもい

留萌